

【資料紹介】

神戸市立博物館所蔵の装飾付須恵器 3 態

山本雅和

館所蔵の装飾付須恵器 3 件と、これに関連する古墳時代後期の土器資料についての調査報告を行う。このうち、1 件では配像が当時の狩猟場面を写實的に表現していることが詳らかとなった。他の 2 件は「模造創作品」である可能性を指摘できた。

1. はじめに

装飾付須恵器は、小型の土器群あるいは小動物像や人物像を壺の肩部に取り付けた形態を採る器種を指す。考古学的な資料としての評価だけではなく、かつては美術工芸品として好古家や愛好家の興味を惹きつけたものと推測され、市場にも流通し、売買・収集されることもままあったようである。

一方で、1970 年代後半以降には、開発に伴う事前発掘調査によって、古墳時代後期の横穴式石室墳から発掘・発見されることが増加し、その類例の増加とともに、肩部に展開する配像群の構成にまで研究が進められた。これまでに、岸本雅敏⁽¹⁾、間壁菫子⁽²⁾、柴垣勇夫⁽³⁾、山田邦和⁽⁴⁾、井守徳男⁽⁵⁾らの研究があり、古墳時代後期の造形の妙としての評価だけではなく、当該期の葬送儀礼を知る上での一資料として位置づけられている⁽⁶⁾。

2. 神戸市立博物館所蔵の装飾付須恵器

神戸市立博物館では、現在までに 3 件の「装飾付須恵器」を資料として所蔵している。以下、順に紹介していく。

「西村コレクション」は、平成 6 年（1994）に故西村敦男氏のご兄弟から当館に寄贈のあった美術品の資料群である。その内訳は、中国製の青銅器や陶磁器、朝鮮製の陶磁器、日本製の陶磁器を中心として、多岐にわたり、受贈した作品の総数は 223 件にも及んでいる。「美術館を創設したい。」と切望されてい

た西村氏の熱い想いを資料点数の豊富さからも感じ取ることができる。

ここで紹介するのは、これらの西村コレクションを構成する資料のうちの考古資料 19 点である。その内訳は、配像のある須恵器装飾付脚付壺（図 1-1）、土師器・須恵器の坏類を主体とする資料（図 2-2~17）と蓋を伴う装飾付脚付有蓋壺（図 3-18・19）である。リニューアル直前まで当館 1 階の常設展示コーナーで鋭意展開していた「見てコレ」と題する小企画展示で、平成 29 年 3 月に受贈後お披露目した資料群である。

須恵器 配像のある装飾付脚付壺（図 1-1） 【西村 123、新 1994-045-151】

須恵器装飾付脚付壺（1）は口径 17.0cm、器高 57.7cm 体部最大径 19.5cm 脚部基部径 14.8cm、脚部底径 26.4cm で、重量は 5.18kg である。山田邦和による分類⁽⁷⁾では、「装飾付壺Ⅱ-1b 類」に相当する。壺部の口縁部の約 1/3 が補修されており、脚部にも接合補修痕が明瞭である。

緩やかに外反しながら延びる壺部の口頸部の端部は垂下気味に丸く仕上げられ、外面の中位以上は凹線に画された 2 段の櫛描波状文帯で飾る。体部はほぼ球形で、最大径部よりもやや上位に、丸みのある断面三角形の突帯が貼り付けられ、この上面に後述する配像が確認できる。外面は 5 条/cm の格子風叩きで仕上げられ、内面は同心円文アテ痕が明瞭に遺存する。

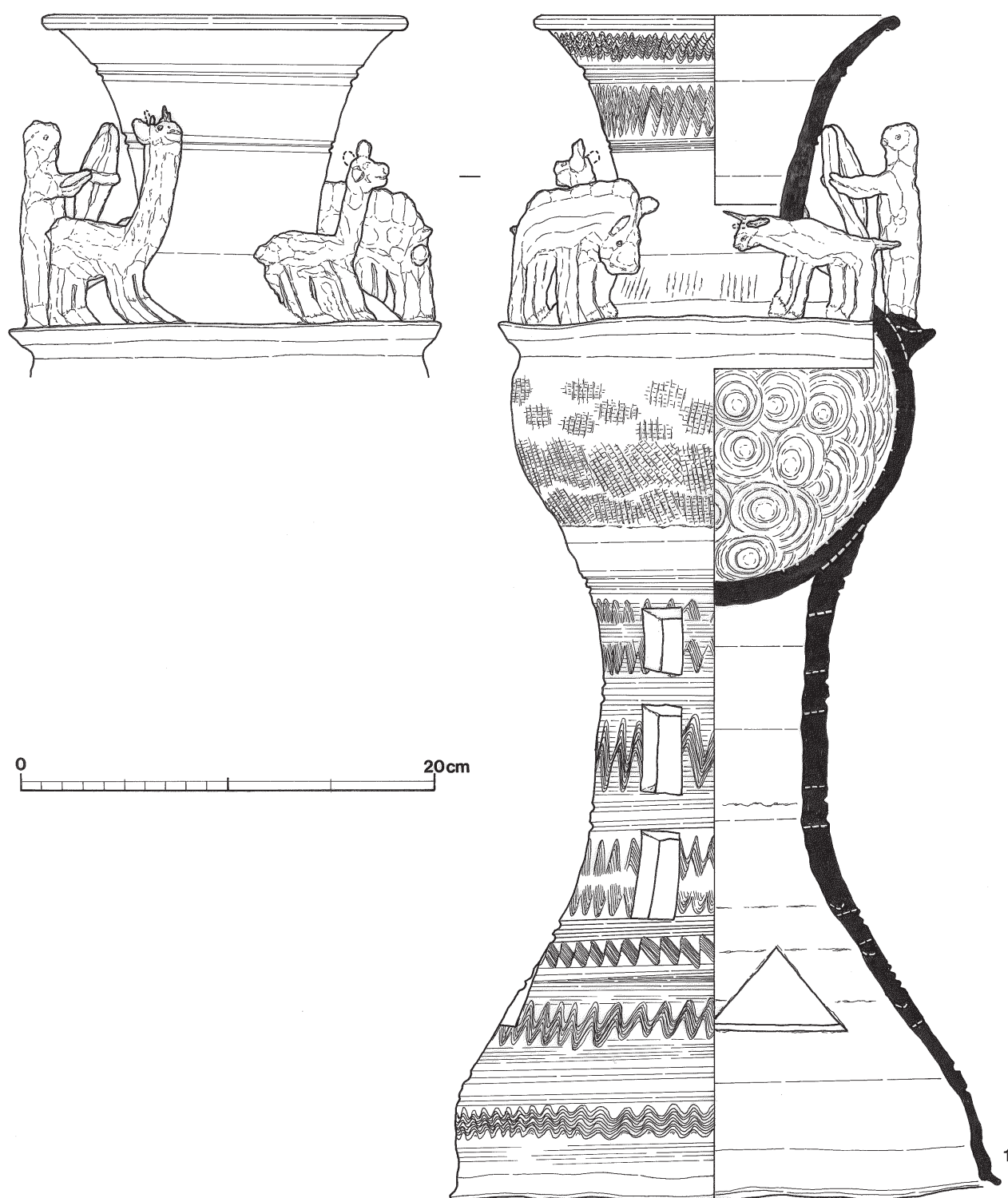


図1 須恵器 配像のある装飾付脚付壺 実測図（西村コレクション）

壺部の体部中位に巡る断面三角形の貼付突帯上に人物1体と動物4体が配像装飾されている。人物は向かって左を向き、矢を番えた弓を構えて、右向きに進んでくるイノシシを正面から狙っている。人物そのものの表現は稚拙で、写実性にやや乏しい印象を受ける。一方で、動物たちはそれぞれ具象的なつくりとなっている。イノシシは右を向いて、肉感も豊かで、正に駆け出さんかという勢いを見せ、その股間には睾丸を想起させる円形の浮文までもが貼り付けられている。人物とイノシシとの2者間の人物寄りには、狩猟犬を想起させる小型の4足獣（イヌ？）が左向きで配される。イノシシの後方には、少し間隔を空けて、右向きの雌シカ（右耳を欠損）と、首を長く延ばし、上方を見上げ、角の表現が明瞭（右角を欠損）な雄シカが配される。これらの動物の個々の脚表現にはヘラによるケズリ調整が顕著で、丸みが乏しい。特に、突帯への接合方法では粗雑な感がぬぐえない。当時の狩猟の情景と農耕への祈りを克明に物語った装飾群像と言え、弥生時代の銅鐸絵画にも共通する表現意匠であることが判る。

脚部は凹線文により画された6段の文様帯で構成され、各文様帯は櫛描波状文で飾られる。外面から穿たれた3段の長方形スカシと1段の三角形スカシが千鳥状に3方向に配される長脚のものである。脚端部は外方へ鋭くつまみだされ、内傾する凹面を形成しており、焼き歪みが顕著である。壺底部との接合面は大きく、外面には回転ナデで仕上げられた無文帯が形成され、やや間延びした感さえ与えている。

この資料には、脚部外面最下段の文様帯に「志吹第1古墳」の紙片（30×40mm）が貼り付けられ、資料出土地の探求に有効である。さらに、収納された木箱の蓋内側には「狩猟人物飾台附壺／兵庫県姫路市志吹（旧志吹村）第一古墳発掘／六世紀（約千四百年前）」のペン書きの紙片が、木箱外側にも「狩猟人物

飾壹附壺／□□式カ土器／□□□期カ千四百年前」と記された紙片が貼り付けられる。姫路市内で「志吹」と称される古墳は『姫路市遺跡分布図』⁽⁸⁾によると、姫路市飾東町志吹に所在する「志吹1号墳」（No.020279）が円墳として唯一である。しかし、本例のような装飾付須恵器は、各地域の首長墓と位置づけできる古墳での副葬例がこれまで多く知られてきている。そうしたなかで、当該資料の出土が想定できる古墳は、御国野町志深との境界付近にかつて存在していた「小丸山古墳」1号墳～4号墳のうちのいずれかが相応しいと考えられる。

小丸山古墳群⁽⁹⁾（No.020868～020871、飾東町志吹）は昭和56年（1981）度に姫路市教育委員会が発掘調査を実施し、1号墳～4号墳の横穴式石室の埋葬施設のほか、箱式石棺が11基確認された。埋葬施設の損壊状況は甚だしく、遺物の遺存状況・内容は芳しくない。早くから開口し、盗掘されたものと推測でき、ここに報告する装飾付須恵器はこれらのいずれかの埋葬施設に由来するものかもしれない。『姫路市史』第7巻⁽¹⁰⁾に掲載された2号墳から出土した櫛描波状文で飾られた須恵器壺の口縁部片の特徴から、この個体が口縁部の欠損補修部分に該当する可能性を想定して、資料の熟覧に臨んだものの、現状では明らかにできなかった。また、当該資料と胎土・焼成・色調などの特徴が類似する須恵器器台（『姫路市史』第7巻には未掲載）が2号墳の出土資料に含まれていることは当該資料の由来を探るうえで示唆に富む。結論としては、この古墳から盗掘・採集されたものかどうかは、今となっては明らかにできない。**須恵器・土師器（図2-2～17）**【西村241、新1994-045-149、新1994-045-150-01～15】

16点の土師器坏・皿、須恵器蓋坏・無蓋高坏・器台などの資料があり、時期的に4群に分けることができる。上述した装飾付脚付壺と同様に、小丸山古墳群から採集された可

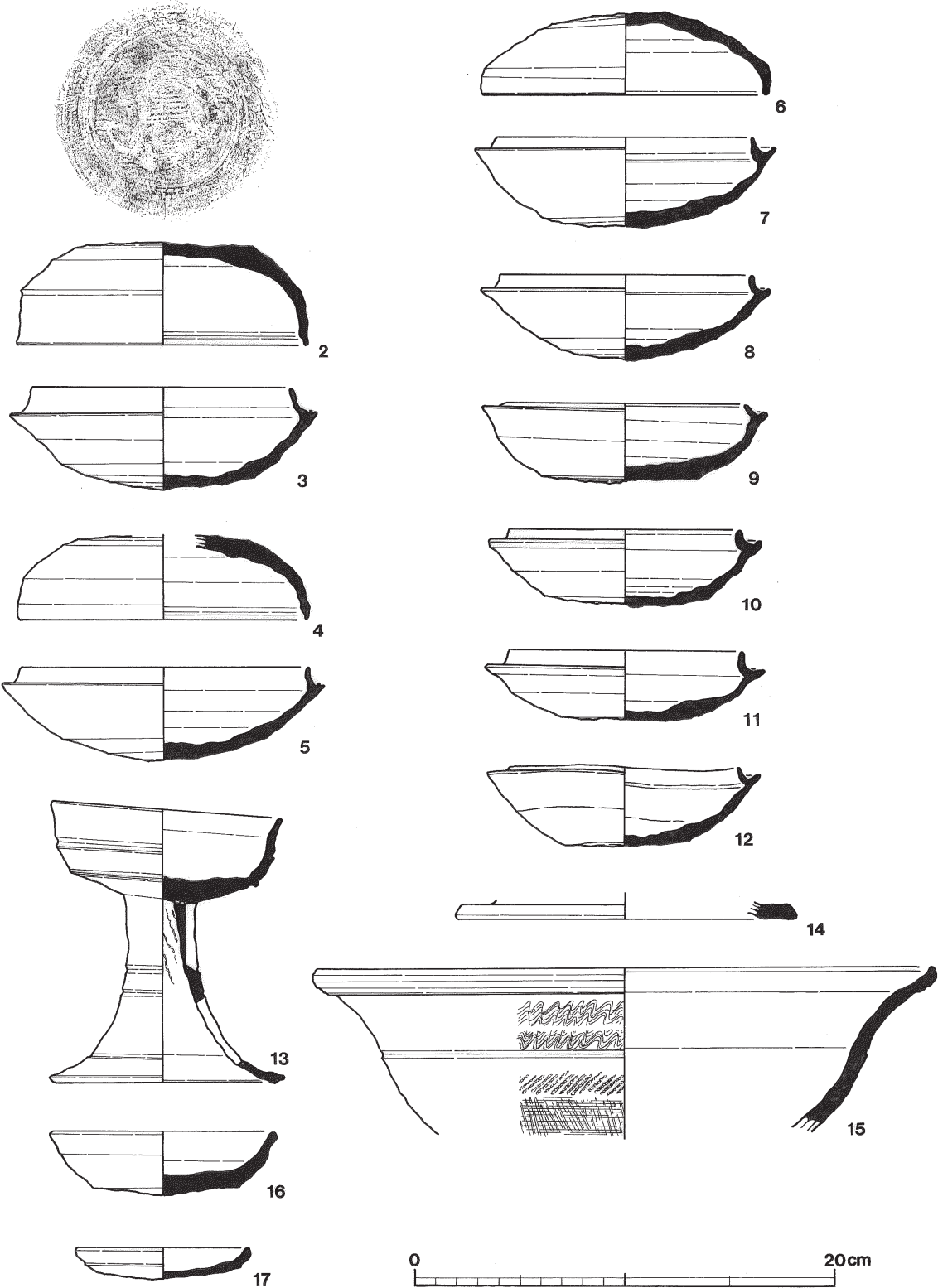


図2 須恵器・土師器 実測図(西村コレクション)

能性を想定していたが、資料熟覧した姫路市保管の小丸山古墳群の出土の坏類と比較すると、肉眼観察では胎土や色調が全く異なる資料群であることが指摘できる。いずれも兵庫県南西部地域の横穴式石室古墳に由来するものと推定できよう。

第1群は(図2-2・3)の2個体で、6世紀前半のMT 15型式併行期のものである。2は口径13.7 cm、器高4.9 cmの須恵器坏蓋で、口縁部と天井部の境の稜と沈線が明瞭である。天井部は2/3の範囲が回転ヘラ切り未調整であるものの、平行叩き具のアテ痕で仕上げ、内面には同心円文のアテ具痕が見られる点が特徴的である。胎土や色調の特徴から相生市那波野丸山窯⁽¹¹⁾の製品かと推定できる。3は口径12.3 cm、受部径14.6 cm、器高4.9 cm、たちあがり高1.2 cmの須恵器坏身で、口縁部たちあがりの約1/3を欠損する。底部外面の1/2は回転ヘラ削り調整である。

第2群は(図2-4~5・15)の3個体が該当し、TK 43型式併行期と考えられる。4の須恵器坏蓋は口縁部の小破片で2/3個体が残存し、復元口径13.4 cm、器高4.0 cmである。口縁端部は巻き込むようにして丸く収め、内面は凹状を呈する。天井部は中央部分が回転ヘラ切り未調整で、この周囲には回転ヘラ削り調整が施される。5の須恵器坏身は口径13.8 cm、受部径15.4 cm、器高4.4 cm、たちあがり高0.9 cmの須恵器坏身で、底部外面1/2は平滑な回転ヘラ削り調整である。15は1/8個体が残存する須恵器器台の鉢部片で、復元径29.2 cm、残存高7.9 cmである。口縁端部を丸く内湾気味に仕上げ、体部上半は櫛描波状文で飾り、中位を巡る凹線1条の下位は櫛描列点文で飾るほかは、4条/cmの平行叩きの後カキ目仕上げである。

第3群の須恵器蓋坏(図2-6~12)は完形品が多く、胎土や色調の特徴から一括採集された資料と想定でき、TK 209型式併行

期の6世紀後半~7世紀初めのものと考えられる。16の土師器坏も同一時期かと考えている。

6は口径13.4 cm、器高4.0 cmの坏蓋で、口縁部は短く内湾して下り、天井部外面1/2は回転ヘラ削り調整である。7は口径12.1 cm、受部径14.4 cm、器高4.3 cm、たちあがり高0.7 cmの坏身で、底体部外面1/2は回転ヘラ切り未調整である。8は口径12.0 cm、受部径13.8 cm、器高4.1 cm、たちあがり高0.7 cmの坏身で、底体部外面1/2は平滑な回転ヘラ削り調整である。9は口径11.4 cm、受部径13.6 cm、器高3.8 cm、たちあがり高0.5 cmの坏身で、ほぼ平らな底部の外面は回転ヘラ切り未調整である。10は口径11.0 cm、受部径13.1 cm、器高3.7 cm、たちあがり高0.7 cmの坏身で、ほぼ平らな底部の外面は回転ヘラ切り後ナデ仕上げである。11は口径11.1 cm、受部径13.3 cm、器高3.4 cm、たちあがり高0.9 cmの坏身で、ほぼ平らな底部の外面は回転ヘラ切り未調整である。12は口縁部の焼き歪みが顕著な坏身で、口径10.9 cm、受部径13.0 cm、器高3.8 cm、たちあがり高0.5 cmの坏身で、ほぼ平らな底部の外面は回転ヘラ切り未調整である。

13も第3群と分類できる須恵器無蓋高坏で、口径10.9 cm、脚基部径3.4 cm、底径10.4 cm、器高13.4 cmで、全体的に鋭い仕上げとなっている。坏部はやや焼き歪みがあり、斜め上方に延びる口縁部と、体部中位に上下を凹線文で画された無文帯が形成される。脚部中位には2条の凹線が巡り、2段となる長方形スカシが2方向に配されるものの、上段のスカシは脚部を貫通していない。脚端部は水平方向に鋭くつまみ出されている。14も高坏脚部と考えており、1/4が残存する。底径16.1 cm、残存高0.8 cmである。

16は同時期かと推定される土師器坏で、口径10.4 cm、底径6.9 cm、器高3.1 cmである。回転ナデ仕上げで、底部外面は回転ヘラ切り

未調整であり、須恵器と同一の技法を採る。

第4群は古墳時代から大きく降り、全く時期の異なる12世紀後半の土師器皿(図2-17)で、口径8.0cm、器高1.5cmである。第1～3群が発掘・採集された横穴式石室内が

再利用された際の所産かと推測できる。

もうひとつの須恵器 装飾付脚付有蓋壺(図3-18・19)【西村124、新1994-045-152-1・2】

18・19も西村コレクションの資料の須恵

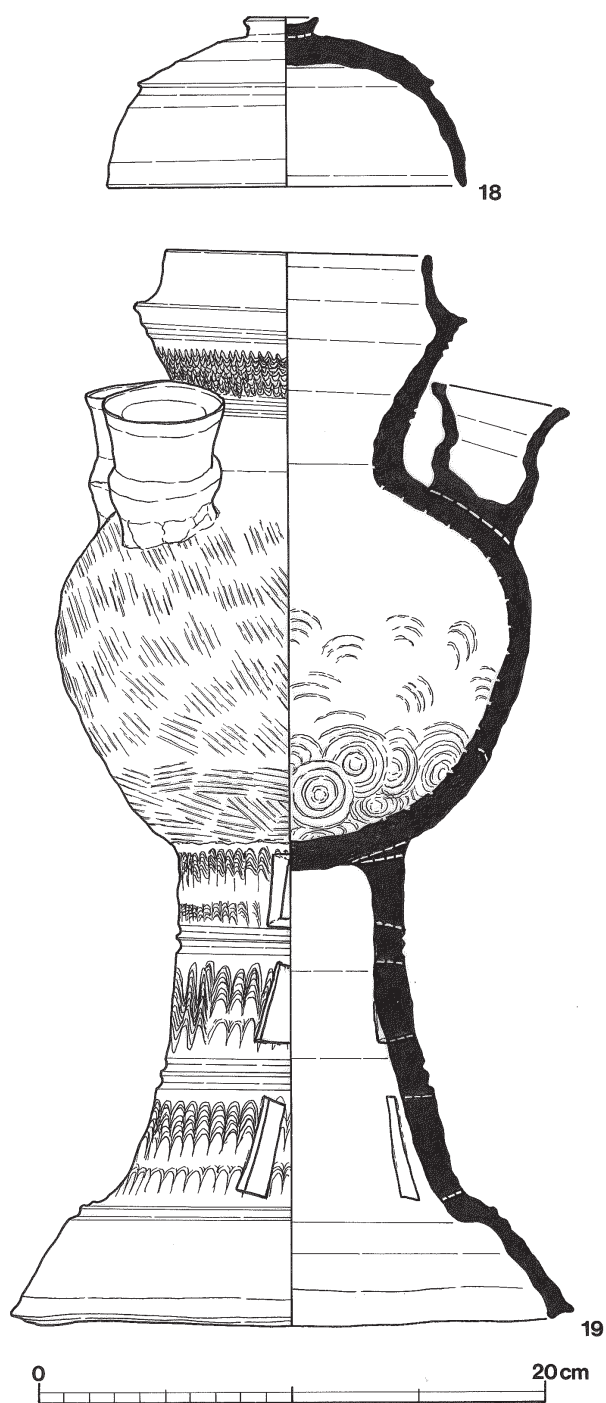


図3 須恵器 装飾付脚付有蓋壺 実測図(西村コレクション)

器装飾付脚付有蓋壺で、19は口径10.5cm、器高46.5cm、体部最大径18.7cm、脚部径20.7cmで、箱書きには「小埴飾付台付壺 須恵器後期」とある。山田分類⁽¹²⁾では、「装飾付壺Ⅲ—1類」に相当する。端部を丸く収める有蓋壺部の口縁部となるたちあがりはやや長く、焼成の際には蓋が被っていたためか、全く自然釉が確認できない。受部は鋭いものの、櫛描波状文で飾られた頸部はやや寸足らずの感を受ける。肩部には5方向に口径約4.5cm、器高約5.0cmの小壺が配される。脚部は櫛描波状文で飾られ、3方向に3段の長方形スカシが刻まれる。

18は口径14.0cm、器高6.7cmの須恵器有蓋壺蓋で、天井頂部に小型の扁平なつまみが付き、長い口縁部と天井部の境には凹線を伴う鋭い稜を有する。本来は19とのセット関係で、山田分類⁽¹³⁾の「蓋系装飾付壺」として分類されるべきであるが、後述のように「子持蓋」形態とはなっていない。

以上の壺蓋と装飾付脚付有蓋壺は、胎土、焼成や色調などの諸特徴から、同じ窯で同時に焼成されたと推定できるものの、有蓋壺の口径に比して、蓋の口径が大きいため、もともとのセット関係ではなかったと推定できる。一見したところでは、形態や製作技法からみると、大きな違和感のない資料ではあるものの、全体的な外見上の仕上がりの印象に比して、重量が異常に重い（総重量4.28kg、脚付有蓋壺3.885kg、蓋0.395kg）ことに加え、欠損部分が全く確認できない点で発掘された資料としては明らかな違和感がある。また、当該期の須恵器であれば、蓋のつまみは壺の肩部に乗る子壺と同形態を呈するものが一般的であるにもかかわらず、有蓋高坏の蓋のつまみと同形態の単純な形態を採っている。このような違和感の存在から、当該資料については「模造創作品」である可能性を指摘しておきたい。

3. 購入資料の須恵器 装飾付脚付有蓋壺 (図4-20)【新1991-194】

20は当館が平成3年度に購入した須恵器の装飾付脚付有蓋壺で、平成5年度の企画展⁽¹⁴⁾に出品し、その後は常設展示室の古墳時代のコーナーで長く展覧していた資料である。購入の際には、共伴する蓋はすでに存在していなかった。法量は口径9.7cm、頸基部径9.1cm、体部最大径17.2cm、脚基部径7.6cm、脚底部径15.0cm、器高28.6cmである。因みに、重量は1.84kgである。山田分類⁽¹⁵⁾では「装飾付壺Ⅲ—1類」とされ、第71図3として掲載されている。有蓋形態を採る壺の口縁部は、たちあがり部が内傾して延び、端部内面を段状に仕上げる。たちあがり部は焼成の際に蓋が被っていなかったため、自然釉が被っている。もともとセットとなる蓋がなかったことの証左であろうか。受部は鈍く突出し、外面の直下は強い回転ナデに凹線様の連続が確認できる。頸部では、上下を凹線

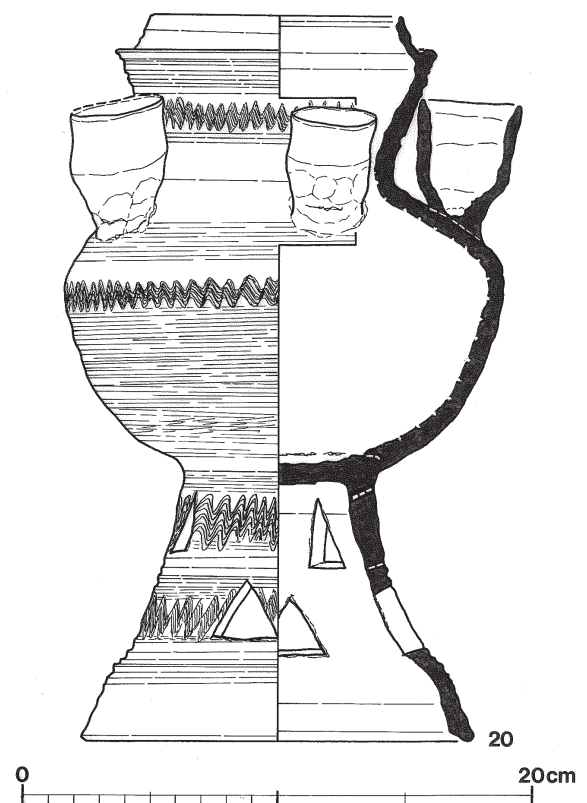


図4 須恵器 装飾付脚付有蓋壺 実測図

によって画され、櫛描波状文が施された文様帯が中位に巡る。肩部には子壺を5方向に配するが、うち2個体については欠損する。子壺の形態は幅広の横ナデで一気に仕上げた単純な口縁部と下方に向かってすぼまる底部からなり、口径3.5～4.0cmと規格は不揃いである。体部とは指頭圧によって接合される。体部外面は回転ナデの後5条/cmのカキ目が施され、最大径部分には8～9線1条の櫛描波状文が施される。体部内面は回転ナデである。底部は内外面ともにナデにより、ほぼ平坦に仕上げられる。

脚部は壺底部から斜め下方にくだり、やや内湾した後、斜め下方に下る。端部は丸く収められる。回転ナデ仕上げの後カキ目が施され、外面の文様は凹線によって区画された3段構成を採り、上段と中段には8～10線1条の櫛描波状文が施され、4方向の三角形スカシが千鳥状に設けられる。

その他の外見の特徴として、壺部・脚部ともに端部に手ズレ様の輝きが顕著である。焼成は良好で、胎土には最大5mm大の長石粒が多く含まれ、色調は暗灰色で、淡黒灰色の自然釉をかぶる。

以上のように、製作技法や形態の特徴等から一見したところでは、真作と思しき資料である。しかし、脚部から壺底部に至る製作技法に疑義が指摘できる。壺底部の成形後に脚部を付加するのではなく、脚部上端部を塞いだ後に、体部下半を続けて成形したことが接合痕から窺える点は重要である。口縁部が有蓋形態を採るために、天地を返しての製作に馴染まなかった結果かもしれない。また、写真図版⁽¹⁶⁾からの判断となっているが、名古屋市博物館所蔵の装飾付須恵器⁽¹⁷⁾が法量とともに、形態の特徴が酷似する資料として指摘できる。両資料を比較すると、双方ともに焼成前から蓋を欠く点、受部直下の凹線が連続するような回転ナデの仕口、子壺の形態と仕上げ、壺体部中位の文様の相違こそあれ、

余りにも類似性が高いという点で、あたかも同一の作者によって「創作」された作品である可能性を指摘できる。

4. まとめ

神戸市立博物館が所蔵する3件の装飾付須恵器を中心に資料の検討を加えてきた。

まず、1とした装飾付脚付壺の配像は、当時の狩猟の様子を的確にとらえた表現構成であることが明確となった。あわせて、「姫路市 志吹第1古墳」の資料貼紙および箱書きがある点を評価すると、姫路市小丸山2号墳の出土品⁽¹⁸⁾であることが十分に想定できる状況が明らかとなった。

なお、2～17とした土師器・須恵器も、同様に小丸山古墳に由来するものではないものの、兵庫県南西部地域の後期横穴式石室古墳に由来すると推定できる。

次に、18・19とした資料は、残念ながら模造・創作品の可能性が高いと推定される⁽¹⁹⁾。また、20も同様に模造・創作品の可能性が高い。特に、20は体部文様の違いこそあれ、名古屋市博物館の所蔵資料と瓜二つの形態を採る個体であると認定でき、ある設計企画に基づいた模造創作品の作者によるものといえよう。

最後に、館蔵資料の整理・調査に関して、終始叱咤激励頂きました谷正俊氏、阿部功氏にこの場を借りて深謝いたします。

【註】

- (1) 岸本雅敏「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第 22 巻第 1 号(通巻 85 号)(考古学研究会、1975)
- (2) 間壁葎子「装飾須恵器の小像群一製作の意図と背景一」『倉敷考古館研究集報』第 20 号(1988)
- (3) 柴垣勇夫ほか『古代の造形美 装飾須恵器展』(愛知県陶磁資料館、1995)
- (4) 山田邦和『須恵器生産の研究』(学生社、1998)
- (5) 井守徳男「装飾付須恵器からみた後期古墳の地域性一兵庫県の場合一」『喜谷美宣先生古稀記念論集』(喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会、2006)
- (6) かつて集落遺跡の装飾付須恵器に言及したことがある。山本雅和「松野遺跡の古墳時代の土器について一装飾付須恵器について」『一新長田駅南第 2 地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う一松野遺跡発掘調査報告書 第 3 ～ 7 次調査』(神戸市教育委員会、2001)
- (7) 註 (4)
- (8) 姫路市埋蔵文化財センターHP「市内の遺跡」>「埋蔵文化財包蔵地検索」(2005)を 2016 年 4 月 15 日に閲覧、参照。
<http://www.city.himeji.lg.jp/maibun-center/category/7-3-0-0-0-0-0-0-0-0-0-0-0.html>
- (9) 平成 28 年 8 月 26 日(金)に当該資料を姫路市埋蔵文化財センターへ搬入したうえで、小丸山古墳の出土資料を熟覧させていただいた。坯類は概して青灰色の発色のもので、以下に報告する資料(2～17)とは胎土・焼成・色調が全く相違する。当日は、姫路市埋蔵文化財センター 秋枝芳氏、森恒裕氏、小柴治子氏にたいへんお世話になりました。ここに記して、深謝いたします。
- (10) 加藤史郎・松本正信・中濱久喜・秋枝芳・大谷輝彦・中川猛・山本博利「4 前方後円墳時代」『姫路市史』第 7 巻下 資料編 考古(姫路市、2010)、小丸山古墳 468 頁図 409-25 として掲載された須恵器壺の口縁部。
- (11) ①森内秀造「相生の古代窯業」『相生市史』第 1 巻(兵庫県相生市・教育委員会、1984) ②相生市教育委員会生涯学習課・相生市立歴史民俗資料館・丸山窯跡群発掘調査団編 相生市文化財調査報告書第 20 集『丸山 1 号窯跡発掘調査報告書』(相生市教育委員会、2021)
- (12) 註 (4)
- (13) 註 (4)
- (14) 平成 6 年 2 月 26 日(土)～4 月 10 日(日)の会期で、企画展「装飾須恵器展」を特別展示室 2 で開催し、兵庫県内の古墳出土資料を主として集成し、展覧した。神戸市立博物館「企画展 装飾須恵器展一出品目録一」『神戸市立博物館年報』No. 11 (1996)
- (15) 註 (4)
- (16) 植崎彰一編『原色愛蔵版 日本の陶磁一古代中世篇 第 1 巻 土師器・須恵器』(中央公論社、1976)図 220 の須恵器子持台付壺で、註(4)でも山田分類「装飾付壺Ⅲ一 1 類」とされ、第 70 図 12 として掲載される。
- (17) [考古] 分類番号 104 (日本地域不明 古墳時代) 受入番号 20 の子持台付壺『名古屋市博物館館蔵品目録』第 1 分冊 総集・考古編(名古屋市博物館、1992)に所収。コロナ禍がなければ、資料の熟覧・調査の後に言及すべきであるが、誠に勝手ながらご容赦いただきたい。
カラー図版 6 として掲載した画像については、名古屋市博物館より提供いただきました。ご担当の亀井久美子氏にはたいへんお世話になりました。ここに記して感謝いたします。
- (18) 井守徳男「兵庫県出土の装飾付須恵器集成(3)一西播磨地域・補遺一」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第 4 号(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、2005)において、小丸山 2 号墳出土の装飾付須恵器の子壺 3 個体について紹介されている。
- (19) 註 (4)「困ったことに、装飾付須恵器にはしばしば偽物がみられる。」とする山田氏のご指摘のとおり、贋作が多いのも、装飾付須恵器の特徴のひとつである。美術品収集家の需要が存在した証しであると考えられる。



挿図写真1-1 配像近景（左から雌シカ、イノシシ、イヌ？、人物）



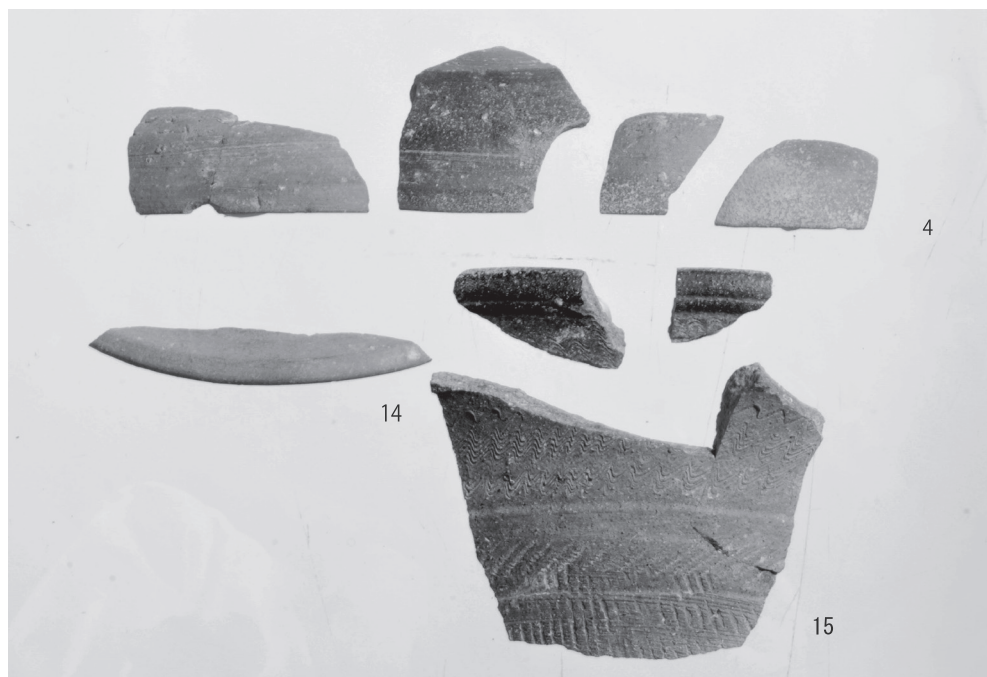
挿図写真1-2 配像近景（左からイノシシ、イヌ？、人物、雄シカ）



挿図写真1-3 配像近景（左から人物、雄シカ、雌シカ、イノシシ）



挿図写真2 土師器・須恵器(1)



挿図写真3
土師器・須恵器（2）



挿図写真4
装飾付須恵器 背面